Japan Society of Obstetrics and Gynecology

P2-358 中規模産科病院における2nd trimesterでの胎児胸部疾患の出生前超音波診断システムの構築の試み

清慈会鈴木病院[1]，藤田保健衛生大[2]
安江由起[1]，関谷隆夫[2]，鈴木崇浩[2]，安江　朗[2]，西澤春紀[2]，長谷川清志[2]，多田　伸[2]，廣田　穣[2]，鈴木清明[1]，宇田川康博[2]

【目的】医療体制の変革に伴って中規模以上の医療施設への分娩の集約化が進行しているが，胎児期から厳重管理が必要な胎児胸部疾患の出生前診断の精度は低い．そこで，中規模病院における出生前超音波診断システムの構築を目的として，胎児胸部疾患のスクリーニングを行った．【方法】2003年4月から2年間に，当院で妊娠管理を行った2906例の妊婦を対象とした．妊娠初期に，全妊婦と夫に対して調査の趣旨と出生前超音波診断についての説明と同意を得た．胎児胸部の超音波スクリーニングは，胎児超音波検査の修練を受けている3人の産科医師が，妊娠18～22週と28～32週に実施した．胎児胸部の観察断面は縦断，前額断，横断のうち2断面とし，心臓はfour-chamber，three-vessel，R/L output viewとした．異常所見検出の際には超音波専門医が精密検査を行った．超音波診断の結果を診療記録と照合して診断精度を検討した．【成績】2903例の新生児のうち33例（1.1%）に胸部疾患が存在した．33例中16例が出生前，17例は新生児期に診断された．ASDと出生前診断された1例は出生後に正常と診断され，同じくCCAMとされた2例は，後にCDHおよび縦隔腫瘍と診断が変更された．胎児胸部疾患の出生前超音波診断の精度は，感度48.5%，特異度99.9%，陽性的中率94.1%であったが，出生後に急変する可能性のある疾患については81.3%が出生前診断できた．【結論】胎児胸部疾患の超音波スクリーニングを実施することにより，妊娠中または出生後に急速に増悪するリスクの高い胎児に対して早期から適切な対処を行うことができた．多くの分娩を取り扱う中規模以上の施設にとって胎児出生前診断システムの構築が急務である．

P2-359 出生前診断された先天性嚢胞性腺腫様奇形（CCAM）の1例

愛知医大
木下伸吾，野口靖之，若槻明彦

先天性嚢胞性腺腫様奇形（CCAM）は先天性嚢胞性疾患の1つであり，近年の胎児超音波，MRI検査の進歩，普及により出生前に診断される症例が増加している．今回我々は妊娠25週で超音波にて胎児胸郭内に嚢胞陰影を認め，MRIでCCAMと診断し，出生後外科的治療を行い良好な経過を得た症例を経験したので報告する．34歳．3経産．既往歴に特記事項なし．前医にて妊婦検診されていたが，妊娠25週の超音波にて胎児胸郭内に嚢胞状陰影を認め，CCAMあるいは横隔膜ヘルニアの疑いにて当院紹介となった．初診時の胎児超音波にて左肺野に多房性で血流の無い嚢胞状陰影を認め，心臓はやや右方に偏位していたが，右肺，横隔膜は保たれていた．羊水量，児の発育は正常であり，明らかな他の合併奇形は認めず外来フォローとした．妊娠32週のMRI検査で，左肺野に多房性の嚢胞を認め，CCAMと診断した．その後，38週3日で予定帝王切開を施行した．児は3024g，女児でApger scoreは1分値9点，5分値9点であった．出生直後にCT施行し，左上葉に多房性嚢胞のCCAMを認めた．NICUにて管理後，日齢6で左上葉切除施行し術後3日で人工呼吸器を離脱した．その後の呼吸状態も安定しており現在も良好に経過している．CCAMは出生直後に重篤な呼吸障害をおこす事が多いが本症例の様に呼吸状態が安定している症例もある．出生前診断を早期にしかも適切に行い，出生後の手術を含めた管理体制を確立しておく事が重要と考えられる．

P2-360 先天性横隔膜ヘルニアに関する臨床的検討

名古屋大
荒木雅子，岡田真由美，津田弘之，真野由紀雄，森光明子，佐藤菜々子，炭竈誠二，早川博生，吉川史隆

【目的】先天性横隔膜ヘルニア（CDH）の予後は肺低形成の程度に左右される．出生前評価として超音波検査や胎児MRIが行われ，予後の推測に有用であるとされている．出生前診断したCDHの出生前所見と予後について，後方視的に検討した．また，実際のCDH肺の組織学的所見について，剖検例を用いて検討した．【方法】1999年から2006年の8年間に他院より紹介され，当院で精査し分娩に至ったCDH25例を対象とした．超音波検査と胎児MRIの指標には，肺胸郭比(L/T比)，肺頭部比(LHR)，肝脱出の有無，羊水過多の有無，肺底部の有無，健側肺体積を用いた．剖検が行われた6例について，肺重量による肺低形成の程度と病理組織学的所見を分析した．【成績】症例は25例（生存群15例/死亡群10例）で，診断週数（22～37週/19～33週），L/T比（mean±S.D.）(0.21±0.06/0.10±0.08)，LHR（mean±S.D.）(1.9±0.90/1.11±0.72)，肝脱出あり（4例27%/9例90%），羊水過多あり（2例13%/6例60%），肺底部あり（11例73%/5例45%）であった．35週前後での健側肺体積（cm3）は，生存群（22.25±5.39），死亡群（7.35±5.92）であった．剖検例は，全例，肺は低形成で，病理組織学的に肺硝子膜症を呈し，肺機能の未熟性による界面活性物質の不足が示唆された．患側肺の発育は，健側肺に比べて未熟であった．【結論】胎児MRIでの肺体積，肺底部の有無，肝脱出の有無は新生児予後予測に有用な指標と考えられた．剖検例の肺は，全例低形成で，肺の機能的未熟性が示唆された．

NII-Electronic Library Service